

昭和53年度の麻疹流行予測調査 成績について

庄 司 キ ク* 伊 藤 陽 子*

I はじめに

麻疹は、現在の小児伝染病の中で、最もポピュラーでしかも重篤——SSPEも含めて——な伝染病の1つで

あるが、その反面、最近開始された予防接種の定期実施化に伴って漸次減少していく伝染病ともみられている。

本報では、このような背景の中で県内2地区で行なった昭和53年度の麻疹流行予測調査成績について報告する。

表-1 年令別及び抗体価別麻疹HAI抗体保有状況

地区	年令 (才)	被検者数 (人)	HAI 抗体価							計
			<8	8	16	32	64	128	256	
湯 沢	0	32	22 (68.8)	1 (3.1)	5 (15.6)	1 (3.1)	1 (3.1)	2 (6.3)	0	10 (31.3)
	1~2	48	27 (56.3)	1 (2.1)	2 (4.2)	4 (8.3)	8 (16.7)	5 (10.4)	1 (2.1)	21 (43.8)
	3~5	37	1 (2.7)	1 (2.7)	1 (2.7)	5 (13.5)	10 (27.0)	13 (35.1)	6 (16.2)	36 (97.3)
	6~10	65	3 (4.6)	3 (4.6)	14 (21.5)	15 (23.1)	14 (21.5)	13 (20.0)	3 (4.6)	62 (95.4)
	小計	182	53 (29.1)	6 (3.3)	22 (12.1)	25 (13.7)	33 (18.1)	33 (18.1)	10 (5.5)	129 (70.9)
大 館	0	30	27 (90.0)	2 (6.7)	0	1 (3.1)	0	0	0	3 (10.0)
	1~2	31	12 (38.8)	3 (9.7)	5 (16.1)	8 (25.8)	3 (9.7)	0	0	19 (61.3)
	3~5	26	5 (19.2)	5 (19.2)	5 (19.2)	6 (23.1)	3 (11.5)	2 (7.7)	0	21 (80.8)
	6~10	43	3 (7.0)	10 (23.3)	11 (25.6)	8 (18.6)	8 (18.6)	3 (7.0)	0	40 (93.0)
	小計	130	47 (36.2)	20 (15.4)	21 (16.2)	23 (17.7)	14 (10.8)	5 (3.8)	0	83 (63.8)
合 計	0	62	49 (79.0)	3 (4.8)	5 (8.1)	2 (3.2)	1 (1.6)	2 (3.2)	0	13 (21.0)
	1~2	79	39 (49.4)	4 (5.1)	7 (8.9)	12 (15.2)	11 (13.9)	5 (6.3)	1 (1.3)	40 (50.6)
	3~5	63	6 (9.5)	6 (9.5)	6 (9.5)	11 (17.5)	13 (20.6)	15 (23.8)	6 (9.5)	57 (90.4)
	6~10	108	6 (5.5)	13 (12.0)	25 (23.1)	23 (21.3)	22 (20.4)	16 (14.8)	3 (2.8)	102 (94.4)
	合計	312	100 (32.1)	26 (8.3)	43 (13.8)	48 (15.4)	47 (15.1)	38 (12.2)	10 (3.2)	212 (67.9)

註。()内は分布率%を示す。

* 秋田県衛生科学研究所

II 材料と方法

被検血清は、昭和53年7月、湯沢市及び大館市の0～10才の小児312名(182名と130名)から採取したもので、いずれも測定時まで -20°C に凍結保存した。

麻疹赤血球凝集抑制(HAI)抗体価の測定は伝染病流行予測調査検査術式¹⁾に基づいて行なった。

III 成績と考察

各地区におけるHAI抗体保有状況は表1及び図1に示す如くであった。すなわち、両地区平均で抗体保有率(≥ 8 倍,%)は67.9%であったが、湯沢地区は大館地区より約7%高かった。

年齢別にみると、0才児、次いで、1～2才児の低保有率が顕著であったが、3才以上になると、大館地区の3～5才児を除けば、93～97.3%の保有率であった。し

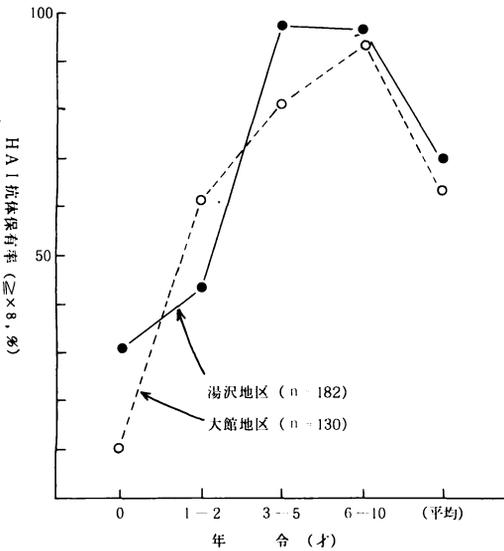


図1. 年齢別麻疹HAI抗体保有率

かし、今回の被検対象となった3～5才児の大半は5才児で占められており、3～4才児は極く一部であったことから、県内の小児の大半は5才以前に麻疹に罹患していることが推定され、このことは、各年齢群間の保有率の差、すなわち、0才群と1～2才群の差が29.6%、1～2才群と3～5才(大半は5才)の差が39.8%、3～5才群と6～10才群の差が4%であったことから首肯されよう。その意味からも、麻疹の予防接種をできるだけ低年齢時一例えば、1～3才——にうけるべきと考えられる。

次に、保有抗体価レベルをみると、0才児では13例中

10例(76.9%)が8～32倍の抗体価であった。しかし、これとは別に行なった調査²⁾で成人の保有抗体価レベルが8～32倍であること及び麻疹患者の15病日以降の抗体価が90.5倍で、しかも、この抗体価が数ヶ月以上持続すると考えられること、更に、抗体保有者の50%以上が月令6ヶ月以内であった、ことなどからみて、0才児における8～32倍の抗体保有は母子免疫に由来するものが多かったと推定される。一方、1～5才児では概ね32～128倍及び6～10才児で16～64倍を示すものが両地区でそれぞれ抗体保有者の69%と68.6%を占めた。しかし、地区別にみると、抗体価の分布が異なり、湯沢地区の方が高抗体価に分布していることからみて、この地区では昭和52年に入ってから麻疹に罹患したものがかなりあったのではないかと考えられる。

IV 結 論

昭和52年7月、湯沢地区と大館地区の0～10才の小児312名を被検対象として、HAI抗体を指標とした麻疹流行予測調査を実施し、以下に要約される成績を得た。

- 1) 全年令群の両地区の平均抗体保有率は67.9%であったが年齢別にみると、0才児は21%と最も低率で、次いで、1～2才児の50.6%であった。3～5才児及び6～10才児は90%以上の保有率であった。
- 2) 抗体価分布をみると、0才児では母子免疫由来とみられる8～32倍が76.9%、1～5才児では32～128倍が69%及び6～10才児では16～64倍が68.6%を占めた。また、湯沢地区では、高抗体価に分布することが多いことから、本年に入ってから麻疹罹患者がかなりあったものと推定された。

文 献

- 1) 厚生省公衆衛生局保健情報課：昭和53年伝染病流行予測調査術式，91—103(1978)
- 2) 森田盛大たち：単一患者血清による感染症の血清学的病原診断に関する研究(第1報)，秋田県衛生科学研究所報，23，83—90(1979)